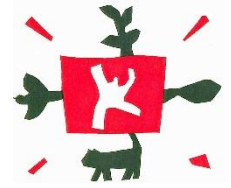


共同通信



2025 年 11 月 30 日 350 号 (560 号)

日本基督教団 西宮公同教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email koudou@gamma.ocn.ne.jp

<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901

To tell the story 249

説教「縦糸と横糸」

マタイによる福音書第 25 章 31～46 節

16 日（日）の「説教」を「縦糸と横糸」にしましたが、なぜそうなったのか思い出せません。最近そういう事が多いのですが、中島みゆきの「糸」では、なかったはずです。

ただ、中島みゆきの「糸」の、縦糸と横糸ではないが、幼稚園のいっぱい残されている「モノ」を片づけていたら、いろんな「織り機」が出てきました。かつて、ずっと以前、「織る」ことに夢中になっていて、その時集めていた道具類で、中には、手作りの道具もあり、久しぶりに、それで織ってみました。それにしても、中島みゆきの「糸」はいい歌で、織り機を試しながら、久しぶりに CD を見つけ出してきて聞いて、口ずさんでいました。

先日、鳥居新平さんを礼拝にお招きし、交流会で歌って下さり、「歌はいいものだ」とおっしゃった方がありました。

もちろん中島みゆきの「糸」はいい歌です。縦糸と横糸を織っていくとできる「布」が、人生そのものであると歌われています。

たぶん、人生を、よくよく見つめてきた時、「糸」のような歌が生まれるのだと思います。ただし、中島みゆきは「ぼーっと生きているんじゃない」こと、かつて雑誌のインタビューで、語っていたことがあります。

教会には、やってくる人たちのおかげで、「退屈」はしないというか、ぼーっと生きている訳にはいかない、と言うか、そこそこ緊張せざるを得なくなります。

「子どもひろば」のスタッフで来てもらっている学生さんの、子どもが来ない日の仕事や「助っ人」でやってくる通信制の高校生の「仕事」などで、最近柿の皮をくるくるむいてもらっています。幼稚園の庭の渋柿の皮むきです。皮むき

に慣れていない人たちですから、くるくるの「むき方」、「なぜ渋柿は、皮をむいて干すと、甘い干柿になるのか」などを、おしゃべりしながら、2 時間くらい、一緒に皮むきをすることになります。「バイト」「助っ人」ですから、それには当然「給料」が発生します。

そうして、皮むきをした柿は、一本の細いロープで 8 個のつるし柿になって、幼稚園の玄関にぶら下がって、「干柿」になっています。で、こんな日常は、なかなかいいものだと思うし、それって、それなりの「縦糸」と「横糸」で生まれる「いい人生」ではあるのです。

一方、世の中には、いい事は何一つない「凄絶」な現実の今日、今を、かろうじて生きのびている人たちもいます。

昨日（11 月 15 日、土）、新聞（朝日）の書評で際だっていたのが、「オマルの日記／ガザの戦火の下で」（オマル・ハマド、最所篤子訳、海と月社）でした。

そこで、書かれているのは、やっとのことで縦糸と横糸で今日の人生があった日々が、ずたずたになり、それでも生きのびている「爆撃でちぎれた誰かの手が顔に張りつく」「極限状況の中で正気を失いながらも、彼は書き続ける」、パレスチナ・ガザのオマルの「オマルの日記」です。

同じ縦糸と横糸でも、織られる布は仕上がることはありません。

紹介する、手製の「織り機」は、一糸ずつ、およそ 5 ミリ間隔で切り込んだみぞに縦糸を張り、その一本一本を、横糸

で交互にひろい上げて行く、それを繰り返すと「布」になります。

パレスチナ・ガザで、確かにそこにもある縦糸と横糸、オマルは「織り続け」ますが、織られるのは、ズタズタの日常です。

毎日の、部屋と教会の行き来の、最近リュックの中に入っているのは、その「オマルの日記」と「チェルノーベリ・マニュアル」（ケイト・ブラウン、阿部純子他訳、監訳者、ノーマ・フィールド他、緑風出版）、「イエス」（ハンス・キュンク、福島揚訳、ヘウレーカ）、「子どもの目をおとなの目に重ねて」（中村桂子、青土社）です。（4 冊だと、なかなか重い）。

「イエス」の最初のあたりで、言及されているのが「神話ではないイエス」です。福音書のイエスは「伝記」ではありませんし、「神話」でもありません。

紀元前 3, 4 年頃に生まれ、30 歳前後に殺されたイエスです。「…西歴史の初め頃、パレスチナで、ローマ皇帝の支配下で生まれ、その後継者ティベリウスの支配下に表舞台に登場し、最後にその執政官ポンテオ・ピラトによって処刑された、まさしく一人の人間の歴史である」（「イエス」）。

そうして織られた「一人の人間の歴史」、その縦糸と横糸の交差する歴史の最後の言葉が、「我が神、我が神、何ゆえ我を見捨て給いき」（マルコによる福音書 15 章 34 節）です。その処刑に立ち会った人間の証言が「…向い側に立って

いた百卒長が、このようにして彼が生きをひきとったのを見て、言った『まことにこの人は神の子であった』（マルコによる福音書 15 章 34 節）です。この「この人は神の子」は、言い換えると、「イエス・キリスト」ということにでもなるのでしょうか。たぶん、なるのだと思います。この人は、見捨てられる現実にあっても、なお「我が神、我が神」と、神に向いあっていたという意味で神の人であったと言えなくはありません。「まことにこの人は神の子であった」というのは、その事の百卒長の「証言」とも言えます。

イエス・キリストの「キリスト」は、たとえば、「勝利者」を意味するのではなく、そして勝利者ではなくても、小さな小さな人間、生きものとしての叫びを失わないなら、神の子、キリストであり得るのです。

「オマルの日記」は、編集者の最所篤子が、2023 年 10 月 11 日に、スマートフォンでアプリを開いたところから始まります。で、2024 年 5 月 30 日の日記…「イスラエル軍の爆撃後、燃えるテントに入ってしまった子どもの話。激しい炎の中、歩けない体の不自由な母親を助けに入って行った少年は誰よりも勇敢だった。翌日、その辺りを搜索していた僕たちは真っ黒に焼け焦げた 2 人が抱き合っているのを見つけた」。

この少年、この少年を助けに向かわせた、からだの不自由な母親。この少年と母親について記述こそが、そのことのオ

マルの日記、記述の・・・「まことにこの人は神の子であった」の神の子、キリストであったと言えるように思えます。イエス・キリストは、そうして示される存在を、例外なく指し示す言葉として受けとめられるのです。

祈ります。

(菅澤 邦明)



シクラメン

不登校は子どもの問題ではない

つい先日、「令和 6 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」が発表されました。不登校児童生徒数は、小学校では 13 万 7704 人（前年度比 7334 人増）、中学校では 21 万 6266 人（同 154 人増）で、小学校と中学校を合計すると 35 万 3970 人（同 7488 人増）となりました。新たに不登校と認知された児童生徒数が減り、不登校継続率も低下しました。しかし、全体の増加率は鈍化したものの、依然として不登校児童生徒数は 12 年連続で増加しており、35 万人超は過去最多となっています。

不登校が増えたというニュースはネガティブなことではありますが、ポジティブに捉えても良いのではないかと思います。なぜなら、社会全体が不登校状態に対して登校を促さない考え方に変わってきていることも、不登校の増加に影響していると感じるからです。しかし、「不登校」という言葉は美しくありません。不登校という言葉には「登校していない子」ではなく、「登校できない子」というニュアンスが含まれているように感じます。誰にでもできることが「できない」というメッセージは、当事者にとって自己肯定感を育みづらく、家族にとっては「学校が合わない子どもがおかしいのではないか」とネガティブな意識を誘発してしまう危険があります。

海外では「不登校」という言葉はありません。ホームエデュケーション、ホー

ムスクーリング、アンスクーリング、オルタネイティブ教育、などの言葉で定義され「積極的に、学校の学びとは違う学びを選択している」という状態を示します。つまり主体的に自分で選んでいるという意味合いが大きくなります。

日本で正式な「学校」として認められているのは学校教育法第 1 条に認められた学校（いわゆる一条校）だけです。そこにおかしさを感じます。文科省は不登校を少なくしようと対策を打っていますが、今は「学校」として認められていないフリースクールやホームスクーリングなどの多様な学び方を認めれば「不登校」という言葉はなくなります。

どんな子どもも、根幹には「学びたい」「友だちとつながりたい」という気持ちがあります。自分らしくいられる場所で、自分に合った方法で学べるように、教育がもっと自由であればこのような問題は起きません。不登校の問題は子どもの問題ではなく、制度の問題です。

学校にはやりたくないこととやってはいけないことしかない

そんな「学校」で働き 15 年になります。今教育界の中でホットな話題は学習指導要領の改訂です。学習指導要領は全国の学校で一定水準の教育を提供するための、文部科学省が定めた教育課程（カリキュラム）の基準であり、10 年に一度改定されます。2027 年小学校での先行実施に向けて、大枠が見えてきました。今回の学習指導要領を中心となって作っ

ているのは上智大学の奈須正裕先生です。「学校にはやりたくないこととやってはいないことしかない」は奈須先生の言葉です。「学校教育に自由を」と、授業時間や授業時数など学校裁量でできることが増える方向で進んでいます。奈須先生は現行の学習指導要領の作成にも関わられました。

現行の学習指導要領の画期的なところは「コンテンツからコンピテンシーへ」と学力観の定義が大きく変わったところにあります。「何を知っているか」というコンテンツ・ベースから「何ができるか」、「どのような問題解決を現に成し遂げるか」というコンピテンシー・ベースへという教育の原理転換は、学力論を大幅に拡張ないしは刷新しました。奈須先生の著作『次代の学びを創る知恵とワザ』の中からコンピテンシー・ベースの学力のイメージについて簡単に説明します。

にらめっこがいい

知り合いの幼稚園の園長先生から面白い話を聞いた。

あるクラスで劇をやることになったんだけど、多くの子が主役をやりたがるから、配役がなかなか決まらない。困った先生が「どうやって決めたらいいと思う」って尋ねたら、子どもたちから「じゃんけん決めて」「くじびきで決める」といろんな案が出た。

そんな中、ある男の子が「僕はにらめっこがいいと思う」って言ったんだ。

これを聞いてあなたはと思うかなあ。

「みんな配役決めのことで一生懸命頭をひねっているのに、何をふざけているんだ」って怒ったりしちゃいけないよ。子どもが言うことやすることにはね、必ずそれなりの意味があるものなんだ。

「ふざけているなんで頭からきめつけるのはやめにして、どうして「にらめっこがいい」って言うのか、それを知りたいなあって思った方がいい。より実践的にいえば、まずは子どものことを面白がるのが得策なんだ。実際、こんな場面で「にらめっこ」を持ち出すなんて、なかなか面白いじゃないか。

そして、面白いと思えば、さらに踏み込んで詳しく聞きたくなる。これは子どもとの間に対等で率直なコミュニケーションを生み出すからそれだけでもいいことづくめだ。

実際、担任の先生も「面白いことを言い出すなあ」とは思ったものの、なぜ「にらめっこがいい」と言っているのか、そのココロがイマイチ読めなかったから、その子に尋ねた。

「どうして、にらめっこがいいだって思うの」

すると、その子が大きな黒目を真っ直ぐに先生へと向けて、こう言ったんだ。

「だってさあ、にらめっこだったら、負けた子が笑っているでしょ」

きっとこの子の中では、「にらめっこ」の前に「じゃんけん」や「くじびき」だって頭の片隅をよぎったに違いない。でも、それじゃイマイチ弱い。なにかほか

にいい方法はないか。そう考えたんだろう。そこがまず、「じゃんけん」や「くじびき」にたどりついたところでよしとした多くの子たちとは一味違う、この子ならではのありようなんだなあ。

では、なぜさらに一歩先まで思案を進めたのか。推測するに、この子は多くの友達が真剣に主役をやりたいがっている気持ち、そして「なれなかったら悲しいな。でも、主役は一人だしな」などと考えてはドキドキしている様子が切実なものとして迫ってきたんじゃないかなあ。「じゃんけん」や「くじびき」という意見が出る中で、じゃんけんに負けたり、くじ引きを引き当てた時のことを考え、そうなっても耐えようと健気に心づもりしている気配なんかも、敏感に察知していたのかもしれない。そんなみんなの気持ちを何とかうまく具合にまるく収める手はないかって、思案したんじゃないかって思うんだ。

こんな風に目の前の状況を捉え、仲間の気持ちを思いやる中で、ふと「にらめっこ」が浮かんできた。ここまでたどり着くのに、随分と深く、またあれこれと考えを巡らせたに違いない。いずれにせよ、見事な問題解決だ。

この子の姿こそ、幼稚園教育要領も含めた、2017年版学習指導要領、つまり、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校というすべての学校段階において実現を目指そうとしている「学力」が端的に現れた姿なんだって、僕は思う。

今、この国が取り組もうとしている学力論の拡張や学校裁量の拡大は子どもたちにとって素敵なことです。「学校だできない」と思われるかもしれませんが、かなり多くのことが校長裁量でできます。できないのではなく、やっていないだけです。学校が子どもも大人もワクワクする場所となるように、あれこれ考えています。道のりは険しいですが、楽しいです。

(石田 航平)



ヤブコウジ

今月の畑だより

緑の葉っぱで、素麺の時や、手巻き寿司の時に、存分に使われたしそは、白い花が咲き、実を付ける頃に摘まれ、「しそ味噌」になりました。そのしそ味噌は、50 パックほど、11 月 8 日（土）の「びっぴぽぽ」のこうどうまつりで、「売り切れ」になりました。

畑では、溝堀り、畝立ても、ピアンタ（カセットガス燃料耕運機）が頑張って、12 畝に 200 株のイチゴが植えられました。

北側では、やはりピアンタが頑張って、3 畝に玉ねぎの苗が植えられています。

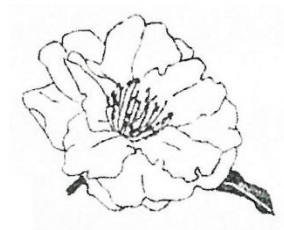
その玉ねぎの苗は、今年も、淡路三原伝道所（南あわじ市）の佃 真人先生の紹介で、500 本の淡路産の「玉ねぎ」の苗を植えることが出来ました。「農家の店しんしん」（淡路三原店）が育てた苗は、仲介業者を経っていない分、「新鮮」な上質な苗で、着床もほぼ 100%、そして元気に冬を越して、春になるとその葉っぱをすくすくと伸ばし、それはそれは立派な玉ねぎになるのです。春には、その葉っぱ付き玉ねぎが、アートガレーヂの前に並んで、2 本（2 玉）200 円で、「化学肥料や農薬を使わず有機栽培」のポスターが貼られ、買っていただくことが出来ました。

そんな畑で、毎週火曜日午前 10 時～11 時ごろまで、「園芸サークル」が集まって、あれやこれやの作業をしています。

冬になると、作業内容は少なからず変

わってきますが、寒さをしのぐ工夫をしながら、面白い集まりになればと願っています。

なお、毎月 1 回、金曜日には、明石大橋を渡って、洲本市安乎平安浦の兵庫教区の平安荘キャンプ場の一角の「畑」を中心に作業をしています。午前 9 時集合、午後 4 時ごろ解散の予定です。



寒椿

あんなこと こんなこと

2025年10月28日(火)

西宮公同幼稚園 園庭

新しい西宮公同教会の旗が出来上がりました。毎朝、歌をうたって旗をあげています。



2025年11月2日(日)

永眠者記念礼拝

礼拝の後、希望者で、満池谷墓地を訪ねました。



2025年11月8日(土)11時～14時ごろ

こうどうまつり2025「ばびぶべぼ」

気持ちのいいお天気に恵まれ、たくさんの人たちが準備をして、たくさんの人たちが遊びに来てくれました。懐かしい顔もたくさん見せてくれた、楽しいおまつりでした。・





2025年11月15日(土)

伏原町の畑

サツマイモの植えられていた畝はすっかりきれいに整地されていて、今度は、イチゴの苗を植えました。厳しい冬を乗り越えることが出来ますように。



福島東電の事故 そこから考える

JR 大野駅前から「link る大熊」まで歩いてみました

9月27日11時12分、大野駅に降り立ちました。天気はまずまず。大熊町の唯一の駅です。5年前常磐線が全面開通し、仙台、上野、東京へのアクセスが可能になりました。それに合わせるように駅周辺は大きく変わろうとしています。大野駅は特急も止まります。普通を含めると1時間1本程度、上下線がそれぞれ走っています。便利はよいです。

常磐線の到着に合わせて大熊町役場までの無料マイクロバスが駅前に待機しています。20分程度で役場です。今回は歩いてlink る大熊へたどりつきます。

事故前、駅前に農協のガソリンスタンドが営業していました。地震で半壊。その建物はもうありません。地震直後の荒れた町並みは解体除染されています。

震災後建設されたクマ SUN テラスでは、ラーメン屋、コンビニ、文具店などの商店が営業しています。とりあえず生活必需品は手に入ります。ここで営業しているラーメン屋で働くのはペルー人。インドネシアの人もありました。世界中から被災地に働きに来ています。同様に隣接して建設された CREVA おおくまには貸事務所、貸室が設置され、事業者が交流できるようになっています。トヨタなどの大企業から地元の会社までいくつもの事務所が開設されています。中間貯蔵

事業センターもあり、住民の中間貯蔵施設への疑問などに対応してくれます。

大熊町は4月現在で住民は1005人（世帯数770）。うち帰還者は318人。残りは新住民です。新しい町に生まれ変わろうとしています。これが復興のもう一つの現実です。約9千人の住民は県内外に避難したままです。

国は駅周辺を優先的に除染、解体、整備し、県内外から事業所を誘致しています。そこには住民の思いはどこまで大切にされているのでしょうか。

震災前、駅から県立大野病院が見えました。その建物は解体されました。4年後には県立医大病院が建設されることになっています。診療科目は20。被災地では最大規模の総合病院です。少しずつ生活にとって必要なインフラが整備されてきています。

9月末。福島も秋を感じさせる空気がただよっています。その中をてくてくと歩を進めました。日よりも良いので汗ばみました。もう人が住まなくなった民家がぼつりぼつりと寂し気に建っています。たまに家人が様子を見に来るのでしょうか、車が止まっています。庭はきれいにされています。その周りは更地が広がっています。そこには住民が暮らした町並みがあつたのです。

家や更地は除染されています。放射性物質は取り除かれ空間線量率は低減されます。

しかし周りを囲む森林は除染されていません。セシウム 137 が環境に浸み込んでいます。森林の除染は不可能です。半減期は 30 年です。

大熊町には、当たり前ですが農地も広がっていました。15 年前、そこら中に黄金色の稲穂がこうべを垂れていたはずです。今も作付けをしている農地はあります。農家は土と向き合わない生きていけないのです。2 年前から野菜類の出荷制限は解除されました。ただし町の農政課に申告して、放射性物質の移行を抑える指導を受ける必要があります。お米については、これら避難指示のあった地域では全袋検査が継続されて、出荷されています。そうやって収穫した農作物は適正な価格で取引されているのでしょうか。市場では買ったたかれていると言われています。さらに農家の高齢化は一気に進んでいます。

今、農地に〃植わって〃いるのは...太陽光発電のパネルです。その黒光りするパネル群が何とも言えない不気味な風景を醸しだしています。太陽光エネルギーを電気エネルギーに変換する。この装置は電気をむさぼらないと成り立たない現代文明の象徴なのです。

メガソーラー施設は復興のシンボルとなっています。メガソーラーの設置業者が絶対損をしない仕組みが作られています。国から助成金が支払われるのです。これは風力発電でも同じです。そして再

生エネルギー業者の多くには東電の資本が入り込んでいます。つまり利権の構造がここでも形作られているのです。

国のやっている復興は元に戻すことではないのです。被災地は住民は地元を去り、真空地帯になっています。国の思惑が優先されるのです。国が好き勝手できるのです。福島第一原発周辺には軍事施設を誘致する計画が進んでいます。

ここ数年、目立つのが土地を買いあさるデベロッパーです。被災地の更地に「〇〇不動産」と立て看が突き刺さっています。住民はもう帰らない。固定資産税を払い続けるより、生きているうちに土地を売ってしまえとなるのです。

放射能だけではなく、税金が住民を苦しめています。避難指示が解除されるとその 1 年後から固定資産税の納税義務が発生します。安く買ったたかれる農作物、それでも農地だからと納税しろ、と国は迫るのです。国は被災者からお金をむしり取ろうとしています。支援金として支給したお金を取り返そうとしているわけです。賃貸住宅に住んでいた人の賠償金はとんでもなく低いです。その人たちはもう戻ってきません。かわりに助成金が出る新住民がやってくるのです。大川原で開校した認定こども園から小中学校までである学び舎・ゆめのもりに 70 人を超える子どもたちが通っています。その多くは大熊町以外からの転入者です。家族単位で移住してきています。これも助成金頼みの施策です。

一方、国は新住民に放射能のリスクを十分に説明しているとはとても思えません。山へ入ってキノコや山菜を放射能測定することもなく、「美味しい、美味しい」と食べているという話です。セシウムは数か月から1年、体内にとどまるとされています。

確かに枝野さんがいうように「直ちに影響はありません」。環境中に拡散した放射性物質は私たちの体を少しずつ蝕んでいることは間違いはありません。

この国は国民に本当のことを知らせない国なのです。真実は私たち自身で得ていくしかないのです。

巨大なメガソーラー施設のそばを小さな川が流れています。人の手が入らなくなって14年半。小川は繁茂する草に埋没しそうになっています。草の海の中を一筋の白い線が走っている、そんな太古の風景が見ることができるのです。自然のたくましさがよくわかります。

放棄された農地に住民はひまわりの種を播きました。黄色いひまわりの花が目を楽ませてくれます。被災地に広がるひまわり畑、放射能汚染という深刻な日常を忘れたい、そんな住民の思いが伝わってきます。国道沿いに木製の火の見櫓が聳えています。消防団が地域を守っていたのです。助け合って地域を守って住民が暮らしていました。

歩き続けると門扉が閉じたままの校舎が見えてきました。大熊町には県立双葉

翔陽高校がありました。8年前休校、そして廃校。その校舎です。震災後、避難先で生徒を受け入れていました。敷地にある立木は手入れされることなく、深い森になろうとしています。15年前まで生徒たちの声がにぎやかに響いていたのです。

この日、歩いている地区はいわゆる特定復興再生拠点区域です。帰還困難区域のなかにあり、優先して除染された地区です。大野駅から町役場のある大川原地区につながります。2019年4月10日に中屋敷地区と合わせて解除されました。大熊町の4割の面積です。人口は4%でした。

帰還困難区域のうち除染され居住が許された地区以外を「白地地区」といいます。「しろじ」と読みます。原発事故から14年半が過ぎても、国から白地地区の避難指示解除へ向けた日程の説明はありません。除染の方針さえ確立されていません。森林などの自然環境に取り込まれたセシウム137を除去することは不可能です。半減期30年まであと15年。半減期を迎えても汚染されていることには変わりありません。

白地地区は除染さえできない土地です。解除によって格差が生じます。暮らすことも農作業もできません。汚染された土地を買う人はいません。自分の土地をどうするかを自身で決めることさえできないのです。住民は宙ぶらりんのままです。

このあたりの民家は立派な家ばかりで

す。都会に住んでいると本当に贅沢な土地の使い方をしているとつくづくうらやましく感じてしまいます。母屋があって納屋があります。庭は広く手入れの行き届いた植木が何本もあります。

駅から 50 分も歩くと大川原地区です。大川原地区には新築の町庁舎が建ち、その隣に復興住宅や賃貸住宅、東電社員の社宅が建ち並んでいます。飲食店も 3 店が営業しています。コンビニ、コインランドリー、郵便局もあります。大川原以外に郵便局以外の金融機関は 2 つ営業しています。宿泊施設や集会場などもあります。食料品や日用品がそろう富岡町のさくらモールまでは約 10 キロ。歩くと 2, 3 時間はかかります。富岡駅までの路面バスが一日 9 往復走っています。それを使えば車を運転できなくなった高齢者でも生活はできます。

その生活は昔のものではありません。元の住民で戻ってきた人たちのほとんどは高齢者です。自宅がある、農地がある、先祖代々受け継いだ土地を放り出すわけにはいかない、そんな思いを皆さんが持っているのです。だから高齢者は帰ってきます。

忘れてはいけないことが一つ、あります。

環境中に放射性セシウム 137 が残存していることです。繰り返しますが半減期は 30 年です。セシウムはカリウムやナトリウムと同じ化学的性質を有しています。

農作物に取り込まれ、それを人間が食べると当然、内部被曝することになります。リスクをゼロにすることはできません。

放射性物質で汚染された地域に住むことをある意味、強いられている住民が存在します。国民の健康な生活を保障するのは国の責任です。それを放棄している、言い換えれば原発事故の被災地ではお金という皮膜で包まれた棄民政策が進められているのです。

(四方 哲)

※ロシナンテ社では福島のことを PDF 版「ロシナンテ通信」として配信中です。総天然色のページです！ 年間購読代 3600 円

ご希望の方は…shikatasatoshi@gmail へ



タイサンボク

～♪ぼくのみる空と きみのみる空は
つながっているから～

名護七曲（150）
「RC」

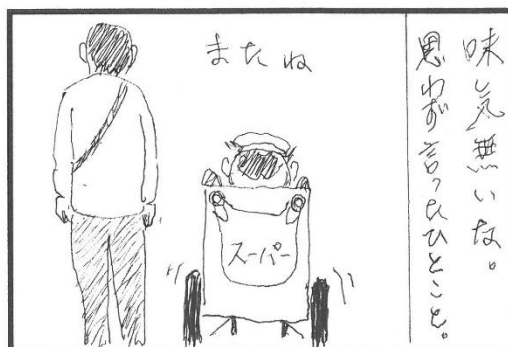
「意味がわかると怖い話」という短編を幾つか読んだんだけど、申し訳ないけど、どれもあんまり怖くなかった。お化けとかより、天井から音もなくいきなりコンクリートが落ちてくる方がよっぽど恐いよ。あれが人の頭に命中したら大怪我じゃ済まんかもしれん▼さて、あれよあれよという間に 11 月。そうこうするうちにアドベントを迎え、やがてクリスマス。今年も張り切ってクリスマスを迎えましょうね～って思っていましたところ、なんと！礼拝堂の天井からコンクリート片がドドーンと落下。名護伝道所も築 51 年にしてそろそろ天井の崩落が始まったようです。たいへん危険なので礼拝堂は現在立ち入り禁止▼建築士でもあられます当伝道所会員の太田先生に診てもらいましたところ、原因は鉄筋の腐食による爆裂とのこと。で、間もなく落ちるであろうと予想される他の危険箇所を全て落としてしまえば、しばらくは大丈夫（かも）—ということで、目視でひび割れが確認できている箇所につきましては、どうにかして事前に全部撃墜してやろうと思っています。難題ではありますけれども、クリスマスまでには何とか礼拝堂が使えるよう、安全第一で頑張ってみようね！▼沖縄地方

では戦後、多くの住宅が RC 構造で建て直されることとなったと聞いております。台風やシロアリの被害を抑えるために鉄やコンクリートなどの高耐久建材が一般住宅にも積極的に採用されたのでしょう。言われてみれば沖縄地方の住宅風景って、三角屋根の木造住宅より、鉄筋コンクリートの四角いお家の方が圧倒的に多い気がします▼もちろん昔ながらの瓦屋根の木造住宅も残ってはいますが、それはそれで今となってはたいへん貴重な建物ではないかと思います。とはいえ、個人負担によるメンテナンスにも限界があり、古民家再生など官民の特別な事業が介入しない限り、その多くが今や朽ち果てゆくばかり。そのまま廃墟と化してしまった空き家も少なくないようです▼鉄筋コンクリートでさえ既に多くの建物が限界を迎えつつある中、木造旧宅の再建・保守は、資材調達や技術者の育成など更に厳しい課題が立ちはだかります。首里城も大事かもしれないけど、人が住む家のための支援政策ってそれ以上に大事なんじゃないかと思うのですが、どうなんでしょうね？▼そんなことよりウチらの礼拝堂よ。会堂があって礼拝が守れるだけでも本当に有り難いことなのですが、思わぬところが突然壊れたりするので困る。

（羽柴 禎）

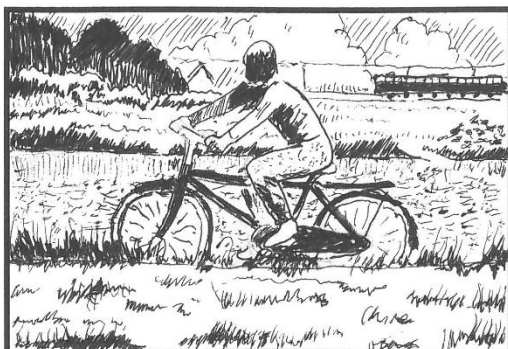
晴れのち福ちゃん さちお作

人 工 音 声



晴れのち福ちゃん さちお画

私 と 自 転 車



つげ義春作『無能の人・日の戯れ』(集刊社)より用

つとかわ・あれこれ

株式会社 新教出版社
小林 望 様

「福音と世界」12月号の辻 学さんの「田川健三氏の死を悼む」を読ませていただきました。「賢い人」ですから、田川さんの働きのほぼ全体を、短い文章で書いておられますが、どの一つを取っても、田川さんの本当の意味での仕事をたどったことになっていないように読めました。

たとえば、田川さんのイエスは、「イエスという男」とあるところに、挑戦があったはず。「書物としての新約聖書」は、英語訳をはじめ、日本語訳など、「翻訳」の問題が、かなり重要で、それは、日本語訳などでは、ほとんどおさなりのなっていること、それこそがおっしゃりたい事だったのではないのでしょうか。

「訳と註」も、何よりも大切にしておられたのが、「写本」の問題のよううかがってききました。

また、「ヨハネ黙示録」の二重構造を、明確に示された事も、そこまでは誰も成し得なかったという意味で、田川さんの挑戦者精神そのものの仕事のように思えます。

長い間、ただの「ファン」をしてきた一人にすぎませんが、辻さんの「追悼」は、田川さんの「挑戦者」としての姿はほぼ何一つ言及しておられないように思えたので、お便りをさせていただきました。

2025年11月20日
西宮公同教会
菅澤 邦明

以下は、現在リニューアルしている西宮公同教会のHPの冒頭に予定されている文章です。

- ・人間は生きものであり、自然の一部である。
(中村桂子)
- ・傾ける耳、涙する目、差し伸べる手
(瀧 矩子)
- ・イエス・キリストのあとに従いながら、ひとは今日の世界で、真に人間らしく生きて、行動して、苦しんで、死んでいくことが出来る。
幸せな時も、不幸な時も、生きる時も、死ぬ時も、神に抱かれて、人々をおおいに助けながら。
(ハンス・キュンク)
- ・人と神、人とひとをつなぐ難しい働きをしています。
(木工職人、農業・料理・絵本(本)・詩人、西宮公同教会 牧師・菅澤邦明)

(S)

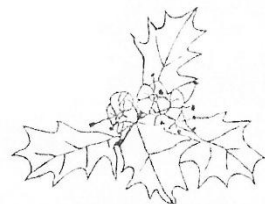
北海道に住む知り合いから、野菜が届く。ジャガイモ、ナガイモ、大根、ニンジンが5本。このニンジンが、多彩で、オレンジ色、黄色、あずき色、白色の4種。白い茄子は、知っていたけれど、白いニンジンは初めて。小さな大根かと思って、少しかじってみたら、ニンジンの味がした。

まな板の上に色々と乗せて眺めているうちに秋の実りの豊かさと自然の色の美しさに「わたし、料理する人でほんとによかった」と、普段は減多に思わないことを想ってしまった。

(S)

「こんなに広いんだ...」初めて訪れた時は、ほんとに羨ましく驚きました。滋賀県の大津東教会のお庭を案内していただき、何台も停められる余裕のある駐車場とは別に、緑豊かな庭が一面に...。木々はとっても立派。ケヤキやかりん、柚子に、みかん、柿、ヒイラギ、もみじなどなど、多彩なラインナップ。足元も、ツワブキや、水仙など、可愛らしい花々も咲いていて、ほんとに素敵な小さな森です。そこに一角に小さな畑を作ってみました...と、助っ人に西宮から菅澤先生と出かけていきました。畑にするには、土の中は石ころでいっぱい。太い根っこもあつたりで、土壌づくりからみんなで頑張りました。その時は、ジャガイモを植えて帰りましたが、今回、お久しぶりにまたお訪ねして、今度は玉ねぎを100株ほど植えようと、カセットボンベで動く耕運機を持って参上。少し肌寒い気温でしたが、動けばとっても気持ちのいいお天気。西宮からは3人で駆け付けましたが、大津東教会の今井先生の他に、約30年ほど前にブラジルから来られたのマルコスさんや、近江平安教会の鳥井先生もご一緒くださり、みんなでワイワイと畑作業をしました。お世話をするのは、なかなか大変だと思いますが、いくらかでも遊べる小さな森に、西宮公同教会の子どもたちもぜひ遊びに行かせていただきたいと思います。

(K)



終